

井上円了の哲学と妖怪学の目的

—在野の哲学者の真のねらい—

A Study of The Aim of Enryo INOUE's Philosophy and *The Specter Science*

三 浦 宏 文

共通教育科目非常勤講師

抄録：

本稿では、明治期の哲学者・仏教学者・教育者であり、日本で初めて妖怪学を研究したという多彩な顔を持つ井上円了（1858~1919）の哲学者としての側面に注目し考察を加えた。円了の哲学は、民衆が極端な思想にとらわれることなく自らの頭で考え判断していくことを促すことをねらいとしていた。したがって、妖怪学研究も民衆の迷信を取り除くためのものであった。あくまで哲学を民衆とつながったものとしていく所に、円了の在野の哲学者としての真骨頂があったのである。

Abstract：

Enryo INOUE (1858~1919) was a philosopher, a scholar of Buddhism, an educator, and the first researcher of *The Specter Science* in Japan. The purpose of this paper is to pay attention to his sides as a philosopher and to consider his thought. The aim of Enryo's philosophy was to prompt the people to be thinking and judging by oneself, without to be confused by various extreme thoughts. And the characteristic of Enryo's philosophy was to consider with the people to live in the real world, not to study in the academism. Thus his research of *The Specter Science* also intend to dispel people's superstition. From this, we can concluded that Enryo was a philosopher to work for the common people to consistently.

キーワード：井上円了、哲学、妖怪学、迷信、明治時代、社会教育

Key Words：Enryo INOUE, Philosophy, *The Specter Science*, Superstition, Meiji Period, Social Education

はじめに

明治期の哲学者井上円了(1858~1919)は、創設されてまもない東京大学文学部哲学科を卒業後、官吏や大学教授という栄職には全く興味を示さず、29歳の若さで自ら哲学の学校「哲学館」(現在の東洋大学)を創設した。さらに全国津々浦々まで講演に出かけ、一生涯の学者・教育者として過ごした人物である。また、円了は、各地の妖怪伝説や怪談話を研究し、その原因となる迷信や誤解といったものを次々と解明し、「妖怪博士」の異名をとった。しかし、円了は単に妖怪研究だけに取り組んでいた学者ではなく、類い稀な哲学者・思想家という別の側面もあり、その妖怪研究もその哲学と関連していた。本稿では、井上円了の哲学者・思想家としての側面に着目し、逆にそこから見えてくる円了の妖怪研究の真の狙いについて考察してみたい。

1 井上円了の生涯¹

1-1 学問修行時代

1-1-1 漢学

井上円了は、安政五年(1858年)越後国三島郡浦村(現新潟県三島郡越後町)浄土真宗大谷派慈光寺に住職井上円悟・妻いくの間に生まれた。明治元年(1868年)数え年11歳の時に石黒忠恵(1845-1941)の漢学塾で学んだ。この当時から円了には学問への情熱が見られ、この漢学塾の上級クラスに属して四書五経、『小学』『朱子家訓』『国史略』『日本外史』『政記』『十八史略』『元明史略』『古文真宝』『坤輿図誌』『明倫和歌集』などを学び、『尚書』『文選』『唐詩選』『蒙求』『史記』『文章軌範』『世説』『荀子』など多数の漢籍を読んだという記録が残っている。

1-1-2 英学

その後円了は、明治七年、戊辰戦争後長岡復興のための人材育成を目的として創られた国漢学校が前進である長岡洋学校に進み、英語教育を受けている。円了は、パーレーの万国史、ミッチェルの大地理書、クイケンブスの小米国史・大米国史、ピネヲの文典、マルカムの英国史、グードリッチの仏国史・羅馬史の英書を読み、算学も学んでいる。この勉学が認められたのか、明治九年には句読師(助教)となり、漢学の教師を務めた。しかし、6月に辞職して新潟英語学校に学び、二十歳の明治十年には県知事の推薦で、京都の東本願寺教師教校英学生となった。

1-1-3 仏教

円了の属する真宗大谷派は佐幕派だったので明治維新後苦難が続いた。このため、人材育成に力を尽くして発展の基礎としようとした。そのために創ったのがこの教師教校であった。明治十年七月、円了は二十歳で東本願寺教師教校に入学したが、英語やその他の学科に抜群の成績だったのであろうか、三年の卒業を待たずに明治十一年四月には東本願寺留学生として上京、東京大学予備門を経て東京大学文学部哲学科へ入学した。

1-1-4 西洋哲学

当時の東京大学では外国人教師が英語で講義するために、まず予備門にはいって英語を学ばな

ければならなかった。その東京大学予備門に、円了は明治十一年九月に入学した。ちょうど円了が予備門に入学する一ヶ月前の明治十一年八月にハーバード大学出身で弱冠二十六歳の青年哲学者アーネスト・フェノロサ（1853-1908）が外国人教師として赴任していた。円了は、このフェノロサからミルの経験論や実証主義、スペンサーの不可知論、コントの実証的な社会論と創造的な人道論、ソクラテスの無我中道的な実践哲学、カントの批判哲学などを学んだ。この時、円了はついに自分の求める真理を探究する学問にたどり着いたという感慨を受けたという²。

そして、三年後の明治十四年九月に二十四歳で東京大学文学部哲学科に入学した。ここで円了は、西洋哲学を引き続きフェノロサに、東洋哲学を井上哲次郎・原坦山・吉谷覚寿らに学んだ。在学中にはカントやヘーゲル、コントなどの研究会（哲学研究会）を開いたり、大学内に文学会を組織して毎月集会を行ったりと積極的に学問の研鑽に努め、さらに哲学会を組織し、その発会式には加藤弘之・西周・西村茂樹・原坦山・島地黙雷・大内青巒など当時の代表的哲学者や仏教学者が入会するなど大きな活躍をした。また、学士号授与式（卒業式）では、当時の大木文部卿の祝辞に対して円了は学生総代として謝辞を朗読している。

1-2 在野の哲学者としての出発と哲学館設立

円了は、東大卒業に際して二つの就職先があった。一つは母校でもある真宗大谷派の教師教校の教師となることであった。これは、教師教校に入学する際に将来教校で働く旨の誓約がなされており、なおかつ東大へ留学までさせてくれたことから大谷派からも強く要請されたに違いない。もう一つは、幼少時の漢学の師石黒忠恵から文部大臣森有礼に紹介され文部省に入るよう勧められたことであった。東大を首席で卒業したエリートは、文部省としても欲しい人材だったことは想像に難くない。ところが、円了は哲学を通して仏教に真理性を見出し、当時の排仏毀釈などの影響で衰退した日本の仏教全体を建て直す決意を固めており、両方とも断ってしまった。今後は在野の哲学者として著作活動を始め、仏教に対しては仏教の外護者として働くということで大谷派にも承諾を得た³。

そして、もう一つの円了の重要な仕事が哲学を普及させるための学校である哲学館の設立であった。円了は哲学を学問の中の中央政府にたとえ、諸学の基礎には哲学がなければならないと訴えた。そして、その哲学による「思想錬磨」によって単に物質的な近代化ではない精神からの近代化が完成するとした。そのために、東大では外国人教師が英語で外国語で講義していたのに対し、哲学館では日本語で講義させ、一年の普通科・二年の高等科のあわせて三年で一通りの知識を得させることを目的とした。この哲学館は大変な人気を得て当初五十名とした定員を約三倍（百四十五名）にせざるを得なかった。主な教員と担当科目は、円了自身が純正哲学を講じ、後に真宗大学（現在の東大）学監となり雑誌『精神界』を発刊して現在にまで影響を及ぼしている宗教哲学者清沢満之が心理学と哲学史を、後に東大印度哲学科初代教授・大谷大学学長・学士院会員となった村上専精が仏教学を、日本初の本格的仏教大辞典を刊行した織田得能が仏教史を、講道館柔道の創始者として有名な嘉納治五郎が教育学を担当した。また哲学館設立時に様々な援助をしてくれた勝海舟、東京帝大総長加藤弘之、東本願寺東京留学生寺田福寿を哲学館の三

恩人としている。

円了は、哲学館において主に教員と仏教者を育成することを目的とした。円了によれば、明治維新以後制度的な近代化は進められたが、本当の意味での近代化は人心の近代化にある。しかし、今まだ民衆は古い迷信などにとらえられたままである。そこで、哲学を通して合理的・批判的精神を身に付けた教員を養成することによって、その教員による教育を受けた民衆たちは、古い迷信などに惑わされない近代的合理精神を持ったいわば「市民」となっていくだろう、というのが円了の狙いであった。

1-3 哲学館事件⁴から社会教育へ

順風満帆のスタートを切ったように見えた円了の哲学館であったが、ある日予想だにしない事件に直面する。明治三十五年十月、教育部第一科（倫理科）の試験に文部省視察官隈元有尚らが臨監し、哲学館教授であった中島徳蔵の倫理学説の試験答案の中に動機が正しければ君主を弑逆しても悪とはならないといった内容の記述を発見した。これは、西洋哲学ではよく知られたミュアヘッドの倫理学説であったが、隈元らは天皇の弑逆を肯定するものだと問題視し、このような内容の学説に教師がなんの意見も加えずに講義したことを強く指弾した。そして、哲学館では不穏な倫理説を教授しているとして、その試験を受けた三名の教員免許状の許可を取り消し、哲学館に与えられていた教員免許状の無試験検定許可も取り消されてしまったのであった。この事件は当時の新聞でも大々的に報道され、様々な論客・知識人を巻き込んだ一大論争を引き起こしたが、教育機関としての哲学館にとっては大打撃であった。円了はこの事態の収拾に奔走し、再び教員免許状無試験検定許可を再び得られるよう文部省に何度も働き掛けた。結果的に後年教員免許状無試験検定許可は再び認可されたが、円了は同時に英国視察の時に知った生涯教育の実践について模索し始める。

明治三十九年、円了は哲学館大学学長を引退し、本格的に日本全国を巡講し始める。円了の目的は、全国で講演会を催して民衆に直接語りかけることであった。この巡講は、学長引退前の明治二十二年から始められのべ十七年間に及んだ。巡講総日数は3187日、44県93市3区3島2962町村に及び、市町村合併前の平成七年の市町村に比較するとその53%にも及ぶという⁵。円了が亡くなったのも、大正八年六月六日、中国大連の本願寺附属幼稚園の講演中であった。円了は講演中脳溢血にたおれ、東本願寺別院で急逝した。61歳であった。

2 「妖怪博士」の異名

また円了は、「妖怪博士」の異名を持っていた。それは、円了が日本各地に伝わる妖怪を学術的に研究した最初の人であったからだった。

円了の考える真の近代化＝「人心の近代化」にとって最も忌むべきものは因習的非合理的思惟であり、その最たるものこそ妖怪に代表される数々の迷信であった。そこで、円了は日本各地に伝わる迷信を調査研究し、その実態の解明を目指した。そのため円了は、東大在学中から不思議

研究会を組織し、大著『妖怪学講義』や『迷信と宗教』を著した⁶。以下円了の解明した迷信の実態のいくつかを見てみたい。

2-1 こっくりさん⁷

明治初期に、「こっくりさん」という不思議な占いが流行り、それにまつわる詐欺や離婚騒動などといったトラブルが社会問題になっていた。この「こっくりさん」に対して、円了は調査に乗り出した。

円了は各地の新聞記事や資料の調査・分析によって全国各地の「こっくりさん」がどこから広まったかを突き止めた。それは、ペリー来航の地として有名な静岡県の下田であった。この下田でアメリカ人船乗りの間に流行っていた不思議な占いがあった。それは、テーブル・ターニングという、当時欧米で流行っていた降霊術の一種であった。当時のヨーロッパでは、近代科学技術が人々の生活を変えていく反面、その反動として靈魂や超常現象というものを信じる人々が増えていた。その時代思潮の中で生まれたのがテーブル・ターニングであった。そのアメリカ人船乗りのやっていたテーブル・ターニングを同乗した日本人船乗りが面白がり、各地の港で行うことで日本中に「こっくりさん」として爆発的に広まっていたというのが、円了の突き止めた「こっくりさん」の起源であった。なんと「こっくりさん」は、日本に昔からあったものではなかったのである。

では、「こっくりさん」という現象はどうして起るのか。円了は様々な性別・年齢の人々の組み合わせで「こっくりさん」の実験を行った。そこで分かったのは、「こっくりさん」の現象が起りやすいのは、信心深く感受性が強い人であるということが分かった。そして、その実験をもとに円了は、「こっくりさん」とは「予期意向」「不覚筋動」のおこすものとした。「予期意向」とは、人間があらかじめこうなって欲しいという結論を持つことであり、そして「不覚筋動」とは人間が無意識のうちに筋肉に力が入ってしまうことである。この「予期意向」と「不覚筋動」という人間の心と身体にもともと備わっている機能こそが、「こっくりさん」の原因となっているというのが、円了の結論であった。

2-2 鬼門⁸

東北（丑寅）の方角を鬼門として忌み嫌う風習が古くからある。これに関して、例えば江戸幕府を開いた徳川家康は、自らの死後に江戸を守るために江戸の鬼門に当たる方角の日光に東照宮を建立した。このような鬼門の風習について、円了は実証的な文献資料の調査に基づいてこうのべている。

これは、中国の古典『海外経』に、東海の中に島があり三千里にわたる桃の木があって、万鬼の集まる東北の門がある、というのが根源である。現在においては、地球上にこのような島がないことは実証されているので、この鬼門というものも根拠がないものである。しかし、このことが実証されても鬼門の迷信はなかなかなくなる。それは、これが一種の宗教的信念になっているからである。

このように述べて、円了は宗教的信念と化した迷信を打破するためには、哲学を根幹に据えた、合理的批判精神に耐え得る正しい宗教でなければならないとするのである。前述した哲学館は、そのために必要な仏教者・宗教者を養成する学校であった。

円了はこの鬼門の迷信が根拠がないことを立証するために、自ら創立した哲学館の鬼門の方角に自宅を建てて住んでいた。ところが、ある時、その哲学館の校舎が円了の自宅を残して火事で全焼してしまう。民衆は「円了さんでも鬼門には勝てなかった」と揶揄したが、円了は「いや鬼門に立てていたからこそ、この自宅だけは助かったのだ」と逆に胸を張ったという。

このように、円了は妖怪に代表される各地の迷信をことごとく喝破していく。そのために、哲学は必要不可欠なものであったのである。では、その円了にとっての哲学とは一体どういうものだったのだろうか。そして、なぜその哲学が妖怪学と結びついていったのだろうか。

3 井上円了にとっての「哲学」

3-1 誤解される哲学

翻って、21世紀に生きる私たちの「哲学」という言葉に対するイメージは土のようなものがあるだろうか。「哲学科出身」「哲学専攻」などというと、どうにも堅苦しく小難しい、理屈っぽくって抽象的、といったあまりいいイメージがないように思う。まして円了が生きた明治時代にあつては、当時の情報環境の問題もあり、「哲学」というものが何であるのかは全くもって理解されていなかった。

例えば、1899年（明治32年）、円了が全国各地を遊説して哲学について講演する時、「哲学とは耳慣れぬ学問の名目なればドンナに面白かろうと予想し、5里10里を遠しとせず来聴」する人がいたり、「哲学は禅学や仙人の学問の類いにして、よほど意表を出でたる面白いことを説いたもので、奇々妙々の学問と考え」聴きに來る人がいたり、また「哲学者はあらゆる学問に通じ、一切のこと何一つ分からぬはずはないと考え、詩文、歌、俳諧の添削を乞うものさえあり」という有り様であったという⁹。

また、円了は哲学が一般の人々から「鍛冶屋の学問」と唱えられる事実があることを述べ、「容易にかみ砕きが出来ぬはあたかも鉄のごとし」と解説している。しかも、こうした俗説にある意味で賛意を示し、それを「余は決して不当とは思いませぬ」と言う。ただし、「哲学は非常にむずかしくて一通りの人知ではかみ砕きの出来ぬことあたかも鉄の如しの意」ではなく、「その万般の学問に関係してその効用の大なること、なお鉄の効用大なるがごとく」であるからだと大まじめに答えている¹⁰。世の中の哲学に対する誤解に正面から向き合い、かつ哲学の効用をユーモアを交えながら語っていく市井の哲学者井上円了の真骨頂を見る気がする。

3-2 世の中につながった哲学

このような誤解や揶揄を受けながらも、円了はなぜ辛抱強く哲学を民衆に語り続けたのだろうか。

例えば、大谷派・東大の後輩で哲学館講師でもあった清沢満之のように、自分の仏教の信仰を哲学的思考を踏まえて深めていったり¹¹、後年の哲学者で独自の思想をゆっくりと自分の中で熟成させていった西田幾多郎のようにいわば自分の中にもって哲学的思索を巡らす¹²という選択肢も円了にはあったはずである。しかし、円了は抽象的で純粹な理論的学問としてのみ哲学をとどめ置くことは出来なかった。円了にとっての哲学とは、必ず実際の世の中とつながったものでなければならなかった。

妖怪学という学問も、実はこの円了の哲学観に関係している。これまでの妖怪に関する伝承・伝説は、「これは幽霊だ」「天狗の仕業だ」「鬼神のたたりだ」という現象の説明ではあるが、その原理の解明ではない、と円了は批判する。哲学を下敷きとした合理的精神をもって様々な妖怪の原理を追求して行けば、結局諸伝説・伝承の妖怪は「仮怪」（かりのあやかし）として雲散霧消してしまうだろう。そして、その時この森羅万象を成立させている本当に不思議な原理だけが残る。これこそが、円了のいう「真怪」（森羅万象を成立させる原理）であった¹³。様々な形の迷信に過ぎない「仮怪」を取り除き、世界全体を成立させている究極の不思議「真怪」にたどり着けば、「人をして泰然として歓楽の別世界に安住せしむること」が出来る。それによって、それまで暗闇の中で迷信に震えていた民衆の心に、真の不思議である「真怪」としての風のささやき、水のせせらぎ、名月の光に心を開いていくことができるのである。円了の哲学を元にした妖怪学とは、まさに「市井の平凡人の卑近な生活」を明るく照らすものであり、円了にとっての哲学のあり方はこのように実際の世の中とつながったものとしてしかありえなかったのである。

3-3 哲学者・井上円了

それでは、井上円了はまったく抽象的な理論哲学を構想しなかったのだろうか。じつは、そうではない。円了は様々な著書で自らの哲学を論ずる体系的哲学者でもあった。その代表的なものが、「中道の論理」とでも言うべき思想である¹⁴。

円了の活躍する明治19年ごろは、ヨーロッパは近代化のまっただ中にあり、唯物論的科学思想が大きな力を持っていた。その一方で、それに対する反動としての神秘主義、例えば前述したこっくりさんのもとになったテーブル・ターニングなどのようなものも一般大衆には信じられていた。それが、日本に伝わり迷信の一種と化していったのは前述した通りである。すなわち、極端な唯物論的思考と、唯心的・心霊主義的信念が相対する状況であったといえる。円了はこのような状況に対して、唯心も唯物も一方的な偏った見解に過ぎず、非物非心の理をもとにすべきだという「中道の論理」を提唱した¹⁵。そして、この哲理の中道は、太極（易）、真如（仏説）、本質（スピノザ）、自覚（カント）、絶対理想（ヘーゲル）、不可知的（スペンサー）といった古今東西に通ずる哲理を合した名称だとする¹⁶。神の本体にしても円了は、有神論と無神論のどちらか一方に行ってしまうのではなく、「存するがごとくにしてかえって存せず、存せざるがごとくにしてかえって存するもの」とするのである¹⁷。これは、一読しても簡単には理解できない説だが、筆者なりに解すると以下ようになる。

私たちは、心というものの存在を、確たる証拠はないのに素朴に確信している。それは、何故

かといえば他の人間たちとの付き合いの中で、その存在を確信する場面に出会うからである。親から頭をなでられた時、恋人の手を握った時、夫や妻と抱きしめ合った時、友人と会心の握手をした時。つまり、私たちは、目の前にいる物質的な肉体を持った人間を通して心の存在を確信しているのである。逆に、親しみを込めて話しかける言葉を抜きにして、私たちは他の人間から心の存在を確信できない。言葉も文化も全く違う国に一人取り残された時を想像してみよう、自分のまわりには単なる物質的な肉体の集団でしかない。親しみをこめて声をかけてくれる、そのような心が相手になれば、相手に感じられなければ、その相手はたんぱく質や水分の塊でしかない。神も同じである。私たちは、途方もない苦難を味わう時、神の不在を感じる。あるいは科学者ならば、精密な科学研究に従事している時、神など存在せず全てを科学で証明できるという確信を持つこともあるかもしれない。しかし、神の不在を確信させたその苦難を何らかの形で克服できた時にこそ、私たちは神の存在を確信し、これまでの苦難がその神が与えてくれた試練であったと感ずることが出来る。あるいは、科学研究によってあまりに見事な秩序を発見したり、あるいは思いもかけない大発明を得たりした時、その科学者は神の存在を直感するかもしれない。

すなわち、私たちの住む世界は、唯心や唯物、有神や無神といったどちらか一方に偏った立場で説明できるほど単純なものではなく、様々な矛盾を抱えつつ互いが互いを支え、互いが互いを生み出しているのである。円了の言う「中道の論理」に立った時、このことが初めて見えてくるのである。

小結

井上円了は、哲学的合理的批判精神によって、様々な迷信を解明していった。円了は、単に欧米の科学技術を取り入れるだけでなく、精神の近代化を実現してこそ、本当の新しい未来が開けてくると考えていた。そのためには、哲学という「思想錬磨の術」を人々に普及させる必要があった。妖怪学とは、円了にとってその「思想錬磨の術」である哲学の応用であった。

「お上」の言うことを疑いもなく信じてきた江戸時代の民衆は、明治維新という新しい時代を迎え自らの頭で考え、判断していくことを必要とするようになった。特に、幕末期佐幕派であった長岡藩に育った円了は、上のももの命令を盲信して突き進んでいく危険性を肌で味わっていた。一人一人の民衆が、合理的批判精神を持って「なぜ」「どうして」と考えていく。そのことによって、迷信に惑わされず、本当の意味での森羅万象の不思議に向き合うことが出来る。円了の人生を賭した哲学の普及活動や妖怪学が目指したものは、妖怪や人魂という日常を逸脱した不可思議なもの探求ではなく、自らの頭で考え判断していく民衆が、自分たちの存在こそが奇跡とも思える不思議な関係性によって生み出されているものだという事に気づくことであったのである。

参考文献

- 井上円了『井上円了選集』東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会編・第1巻～25巻・東洋大学・1987～2004年
 同 『井上円了・妖怪学全集』東洋大学井上円了記念学術センター編・第1～6巻・柏書房・1999年～2001年
 同 『井上円了・外道哲学—漢文經典によるインド哲学研究』柏書房・2003年
- 伊東一夫「明治時代における井上学祖のキリスト教批判の考察」『井上円了の学理思想』東洋大学井上円了研究会第1部会 清水乞編著・東洋大学・1989年
- 菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』角川書店(角川選書)・2013年
- 清沢満之『清沢満之集』岩波書店(岩波文庫)・2012年
- 清水清明(編)『哲学館事件と倫理問題(みすずプリント18)』みすず書房・2005年
- 清水 乞「解説—井上哲次郎「インド哲学史」草稿と井上円了の『外道哲学』」『井上円了・外道哲学—漢文經典によるインド哲学研究』柏書房・2003年
 同 「初期著作にみられる井上円了の東・西哲学の対比」『井上円了の学理思想』東洋大学井上円了研究会第1部会 清水乞編著・東洋大学・1989年
- 菅沼晃「井上円了のインド哲学研究—『外道哲学』を中心に—」『井上円了の学理思想』東洋大学井上円了研究会第1部会 清水乞編著・東洋大学・1989年
 同 「新仏教運動と哲学館—境野黄洋と高峰米峰を中心に—」『印度学佛教学研究』第49巻第1号・日本印度学仏教学会・2000年
- 竹村牧男『西田幾多郎と仏教—禪と真宗の根底を極める—』大東出版社・2002年
- 田村晃祐「解説—井上円了の生涯と思想」『井上円了・外道哲学—漢文經典によるインド哲学研究』柏書房・2003年
- 東洋大学(編)『図説 東洋大学100年』東洋大学・1988年
 同 『井上円了の教育理念』東洋大学
<https://www.toyo.ac.jp/site/enryo/publication01-01.html> (2016年9月27日確認)
- 量 義治「井上円了における仏教とキリスト教の対比」『井上円了センター年報』Vol.6・東洋大学井上円了記念学術センター・1997年
- 立川武蔵「井上円了の仏教思想」『印度学佛教学研究』第49巻第1号・日本印度学仏教学会・2000年
 同 「解説—井上円了の『外道哲学』」『井上円了・外道哲学—漢文經典によるインド哲学研究』柏書房
- 三浦節夫『井上円了 日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社・2016年
- 宮本正尊『明治仏教の思潮』佼成出版社・1975年

注

- 1 井上円了の生涯については、主に田村晃祐「解説—井上円了の生涯と思想」『井上円了・外道哲学—漢文經典によるインド哲学研究』柏書房・2003年、東洋大学（編）『図説 東洋大学100年』1 東洋大学・1988年、及び同上『井上円了の教育理念』東洋大学によっている。
- 2 宮本正尊『明治仏教の思潮』佼成出版社・1975年・267頁参照。
- 3 田村前掲論文672頁参照。
- 4 哲学館事件についての詳細は、清水清明（編）『哲学館事件と倫理問題（みすずプリント18）』みすず書房が詳しい。
- 5 宮本前掲書・264～265頁参照。
- 6 田村前掲論文673頁参照。
- 7 井上円了『妖怪玄談—孤狐狸の事』哲学書院・1887年（『井上円了妖怪学全集』第4巻）参照。
- 8 井上円了『迷信と宗教』至誠堂書店・1916年（『井上円了妖怪学全集』第5巻）参照。
- 9 宮本前掲書参照。
- 10 宮本前掲書参照。
- 11 清沢満之については、例えば清沢満之『清沢満之集』岩波文庫がコンパクトにまとまっており清沢の思想の一端を理解しやすい。
- 12 西田幾多郎に関しては、多くの著書・論文及び研究書があるが、仏教との関係ではたとえば竹村牧男『西田幾多郎と仏教—禪と真宗の根底を極める—』大東出版社・2002年を参照。
- 13 井上円了『真怪』丙午出版社・1919年（『井上円了妖怪学全集』第5巻）参照。
- 14 田村前掲論文678～679頁参照。
- 15 井上円了『哲学一夕話』1886年（『井上円了選集第一巻』東洋大学100周年記念論文集編纂委員会編・東洋大学・35頁）参照。
- 16 井上円了『哲学一夕話』（『井上円了選集第一巻』・48頁）参照。
- 17 井上円了『哲学一夕話』（『井上円了選集第一巻』・50頁）参照。